

(様式1)

令和6年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	(1) 一般目標 一人一人に応じた健康な生活を目指し、自己教育力を養い、進んで社会参加できる児童生徒を育成する。 (2) 具体目標 ア自己の病気を理解し、病気に向き合い、安全で健康な生活を営む児童生徒を育成する。(校訓「健康」から) イ夢や志の実現のため、主体的・対話的に学習に取り組む児童生徒を育成する。(校訓「自主」から) ウ望ましい集団や豊かな体験を通して社会性と豊かな心を育む児童生徒を育成する。(校訓「協同」から) エ社会的自立を目指し、障害による困難を改善・克服し、積極的に社会参加しようとする児童生徒を育成する。(校訓「自主」「協同」から)
------------	--

学校整理番号	特8
学校名	青森県立青森若葉養護学校
対象障害種別	視覚・聴覚・知的・肢体 <u>病弱</u>

(2) 現状と課題	・在籍する児童生徒が30名弱であることに加え、児童生徒の登校が安定しないことにより、児童生徒同士の「対話的な学び」が成立させづらい状態にある。そのため、学校運営協議会で話題に取り上げながら、地域資源(学生団体、町内会)を活用した授業づくりに取り組んでいる。 ・精神疾患の児童生徒が約半数を占めていることから、令和3年度よりCo-MaMeを活用した実態把握を行い、医療機関並びに保護者と共通の尺度で児童生徒の実態把握に努めている。 ・これまで同様、定期的に医療機関との情報交換をする「支援連携会議」を開催し、医学的見地からの助言を得ながら児童生徒の指導にあたっている。児童生徒の病状の多様化に伴い、今年度は1院(青森市民病院)加えて7院と「支援連携会議」を行っている。 ・転入生の多くが前籍校において不登校の経験があり、本校に転校後も登校が安定しない生徒が複数在籍する。これまで以上に病状や障がい特性に応じた指導をするため、ICT機器を活用しオンラインによる遠隔授業を行っている。なお、オンラインによる遠隔授業を実施するに当たって、校内規程を整備した。 ・医療的ケア対象児の増加に伴い、これまでどおり校内医療的ケア安全委員会の定期的開催をするとともに、指導医並びに青森県小児在宅支援センターの助言を得ながら、校内体制の整備に努めている。併せて、認定教職員を拡充するため研修受講を奨励している。
-----------	---

自己評価実施日	令和6年12月20日(金)
学校関係者評価実施日	令和7年2月3日(月)、7日(金)

(3) 重点目標	1 児童生徒一人一人の障がい特性と指導課題を踏まえた指導
	2 豊かな心を育てる教育の展開
	3 キャリア教育の推進
	4 保護者との信頼関係の構築
	5 教職員が力を発揮できる環境の構築と研修の充実
	6 病弱特別支援教育のネットワーク体制の充実

(4) 結果の公表	令和7年2月14日(金)第3回参観日全体会において、保護者に説明した。 また、全体会欠席の保護者に対しては、説明資料を配付した。 さらに、学校webページ上に結果を掲載する。
-----------	---

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成	
学識経験者(大学教授)	1名
医療関係者(小児科医師)	1名
民間企業関係者(会社社長他)	2名
地域住民(町会長)	1名
元教員	1名
保護者(PTA会長)	1名
福祉関係者(NPO法人代表)	1名
大学生	1名

自 己 評 価				学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策	
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	児童生徒一人一人の障がい特性と指導課題を踏まえた指導	Co-MaMe等を活用した小学部から高等部まで一人一人に応じた指導の推進	<ul style="list-style-type: none"> Co-MaMeの活用を推進するため、全職員を対象にした説明会を開催した。また、個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成するに当たって、その指標の一つとして使用した。 児童生徒一人一人の実態を全職員が把握する目的で、年3回ケース会議を開催した。 教職員以上に保護者が高い評価であった。 	A	<p>・保護者としてCo-MaMeを用いることによって、我が子を客観的に捉え、今後のことを考えるよいきっかけとなった。根拠に基づく授業の構築を目指すのであれば、継続を希望する。</p> <p>・一人一人の児童生徒に対して、きめ細やかな教育を実践していることが見て取れる。ぜひ継続してほしい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> Co-MaMeを用いた児童生徒の実態把握に基づく指導計画の作成については、保護者からの評価が高く、その効果を実感していることが推察されたことから、継続して使用する。また、Co-MaMeに留まらず客観的な指標を用い、根拠のある指導に努めたい。
		保護者、前籍校、医療、福祉等関係機関等との連携	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の病状や障がいの多様化に伴い、支援連携会議の対象を7病院に拡大し、医療的見地からの助言をいただきながら、日々の授業づくりに取り組んだ。 必要に応じて、児童生徒が利用する福祉施設等と情報交換する機会を設定し、児童生徒を取り巻く関係者が同じ方向を見て支援に当たるようにした。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 医療からの助言をいただくため、引き続き支援連携会議を開催する。また、定期開催に留まらず、児童生徒の病状に応じて臨時的に相談できる体制を継続する。
		主体的、対話的で深く学ぶ態度を育成する授業及び特別活動の研究と推進	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究でICT機器を活用した授業の研究に取り組んだ。 一部授業ではあるが、学生団体を招聘し、対話的な学びを展開できる環境を整えた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 在籍数の少なさに加え、登校が安定しない児童生徒の対話的な学びを保障するため、より一層地域資源を有効に活用し、「対話」が保障できる授業づくりに努める。
		根拠に基づく手立ての構築及び「授業力の向上」をめざした授業改善	※番号1「一人一人に応じた指導の推進」、番号5「校内研究の充実」と合わせて評価するため、評価項目はなし。			
		ICTを効果的に活用した授業実践の推進	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究のテーマとしてICT機器の活用を掲げた研究活動、SD ICT支援によるミニ研修会の開催により、授業実践場面におけるICT機器利用が顕著に増加した。 タブレット端末の持ち帰りに関する規程を策定したところ、家庭における学習に活用する生徒が増加した。 これまでの情報管理委員会を、第二分掌であるサポートデスクの一つ「SD ICT支援」として位置づけ、ハード面・ソフト面の両面をサポートできるようにした。 	A		<ul style="list-style-type: none"> 授業づくりの手段であるICT機器については、教員の技能向上を図るためのミニ研修会を継続する。 校内研究の成果を元に、「ICT機器を活用した授業」に適合する「新若葉スタンダード」（試案）の使用をし、効果を検証する。検証結果に基づき、令和7年度より「新若葉スタンダード」として使用する。

2	豊かな心を育てる教育の展開	教育活動全般を通じた道徳教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳教育推進教師による「特別の教科道徳」に関する評価についての情報提供が行われたことにより、道徳科の考え方や評価の仕方を共通理解することができた。 ・他者と意見交換しながら自己の考えを整理できるよう学部合同の道徳科の授業に取り組んだ。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人に対してきめ細やかな教育を行おうとする先生方の思いに対して経緯を表す。引き続き、児童生徒一人一人に目を向けた学校改善に努めてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、道徳教育推進教師を中心に、全体計画に基づいた授業実践例を蓄積し、教員が共有できるようにする。 ・全体計画別業を作成し、学校行事等と関連させながら授業展開できるようにする。 ・学校運営協議会の力を借りながら、「対話的」な特別の教科道徳の実施をする。
		児童生徒と教師、子ども同士の豊かな人間関係を育む活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒会執行部が中心となり、全校集会で異年齢の児童生徒が触れ合える活動を計画、実践した。また、小学部から高等部までの児童生徒を縦割りのグループに編成した委員会活動を週1回設定したことで、児童生徒相互のやりとりが充足し、人間関係の育成に資することができた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、児童生徒会執行部を中心に、児童生徒の主体的な活動を目指した児童生徒会活動を推進する。
		病気や精神疾患に対応した指導力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ※番号1「一人一人に応じた指導の推進」と合わせて評価するため、評価項目はなし。 			
		安全指導の徹底と自己管理能力の醸成（感染症対策、医療的ケア、いじめ防止教育、避難訓練等）	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練は定期的を開催するとともに、専門家を招聘しての研修会を開催することで、防災意識の醸成に努めた。 ・定期的に医療的ケア安全委員会、いじめ防止対策委員会を開催した。 ・本校の特性上、新型コロナウイルス感染症の5類以降も、学校医の指導を得ながら引き続き無理のない範囲でマスク着用、手指消毒の徹底等を実施した。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・今年度同様に計画的に安全指導に取り組むとともに、地域を巻き込んだ防災訓練を実施する。 ・感染症対策については、今後も学校医の指導を得ながら適切に対応する。
3	キャリア教育の推進	小・中・高一貫したキャリア教育の計画的指導の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア・パスポートに本校独自のワークシートを加えたキャリアブックを用意し、主に学校行事の事前、事後学習で使用した。 ・教職員、保護者、児童生徒（除高等部生徒）のいずれにおいても、他項目に比較し低い評価であった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・手段としての「キャリア・パスポート」が焦点化されていることで、本質的な「キャリア教育の推進」に目が向きづらいアンケート項目になった可能性があり、「キャリア・パスポート」を十分に理解していない方が低い評価をしたことが推察される。アンケート項目の再考を検討したい。 ・教職員が「キャリア・パスポート」の意義を理解して使用することが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の「キャリア教育」に関する理解をより一層高め、自信をもって保護者や児童生徒に説明できるようにする。 ・児童生徒、保護者に対しては「キャリア・パスポート」の意義や効果について丁寧に説明する機会を設定し、児童生徒、保護者、教職員が一丸となって進路実現ひいては自己実現できるようにする。

		自己選択と自己決定、自己表現の力を育てる指導や支援の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・いずれの児童生徒に対しても、授業時間内に「自分で考え、自分で決定する」機会を設定した授業づくりを推進した。 ・特に、卒業学年の児童生徒に対しては、学級担任と進路指導主事による進路面談を複数回実施し、各自が目指す進路の実現に貢献した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・本校版「キャリア・パスポート」である「キャリアブック」が学校行事のまとめに終始しており、自分の将来とどうつながっているのかがイメージしづらい。もっと将来のことと関連付けるような内容構成にする必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会の協力を得ながら、企業や福祉事業所等とも連携した活動を計画する。
		自立と社会参加を見据えた進路研修会の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・外部機関を利用し、職場見学や職場体験、またハローワークなど関係する機関の見学を計画的に実施した。 ・保護者向けには、家庭教育学級として職場施設見学会を開催した。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き取り組む。
4	保護者との信頼関係の構築	児童生徒の学習成果や課題の共有（面談の実施）	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育支援計画並びに個別の指導計画に係る面談機会を設定し、計画的に保護者と情報交換をした。 ・個人情報の確保については、年度初めにプライバシー確保に関する意向確認をした。 ・教職員、保護者、児童生徒ともに高い評価であった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続きの指導を期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き取り組む。
		長期欠席（入院を含む）時の支援（遠隔授業、訪問指導や保護者支援）	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインによる遠隔授業に係る校内規程を定め、病状により登校が安定しない児童生徒に対して実施した。 ・長期欠席の児童生徒については、各学部、必要に応じて校内教育支援委員会で方針を確認し対応した。また、支援連携会議を通じ、主治医から医学的な助言をいただきながら支援に当たった。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、支援連携会議による医学的見地からの助言を受けながら、校内教育支援委員会において支援方針を検討し、対象児童生徒の支援に当たる。 ・オンラインによる遠隔授業については、引き続き計画的に実施するとともに、技能教科を中心としたより効果的な授業のあり方について検討を継続する。
5	教職員が力を発揮できる環境の構築と研修の充実	休暇制度等の活用促進、会議や事務処理の効率化による時間の創出	<ul style="list-style-type: none"> ・イクボス宣言、職員のワーク・ライフ・バランス推進目標を掲げ、自分の生き方を考えた業務の推進に努めた。 ・休暇を取得しやすいスケジュールの組み方に心がけた（例：長期休業中のノー会議デー設定）。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続きの指導を期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員一人一人の心の豊かさを向上させる時間の創出のため、月1回以上「定時退勤デー」を設定する。
		教職員が個性や研究の成果を出せる授業や事業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の職歴や経験に基づき、巡回相談員や特スポ理事等を任命した。 ・管理職は教職員個々の研究意欲や研修ニーズを把握し、希望に添う形での研修派遣に努めた。 	B		<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の教職員が得意とする分野の授業や分掌業務等の担当ができるような校内体制を作る。 ・引き続き、管理職は一人一人の教職員の特性やキャリアを考えた、研修の奨励に努める。
		教育実践情報の収集や意見交換が活発な校内研究活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の課題意識に基づくグループ編成により校内研究に取り組んだ。ICT機器を活用しながら積極的に意見交換をし、研究成果をまとめた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度は新テーマによる校内研究を開始するとともに、令和6年度までの研究成果の効果検証を行う。

		県内及び県外特別支援学校との合同研修	<ul style="list-style-type: none"> ・全病連（オンデマンド開催）北海道東北病連（ハイブリッド開催）青特研病弱虚弱教育部会研究大会（対面開催）に全職員が参加した。 ・校内における研修報告会は、自己の働き方に合わせて受講できるよう一堂に会する形式から、オンデマンド形式に変更した。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き取り組む。 ・令和8・9年度青特研病弱虚弱教育部会事務局担当に向けて、現担当校である浪岡養護学校と定期的に情報交換を行うとともに、要請に応じて連携協力し、本県の病弱虚弱教育の研究推進に努める。
6	病弱特別支援教育のセンター的機能の充実	院内学級ネットワーク体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・院内学級に在籍児童生徒がいない場合であっても、院内担当が定期的に院内学級に赴き、環境整備を行った。 ・本校の状況を周知するため、県病掲示板を活用し、掲示物を用いて定期的に情報提供した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・一閲覧者という視点からすると、本校のwebページは文字量が多く固い印象がある。一見して内容がわかるような工夫が必要である。また、ターゲットを明確にし、相手が何を求めているのかを考えながら記事をつくることが大事である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き取り組む。
		校外支援及び教育相談の充実（小・中・高等学校）	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育コーディネーター、巡回相談員を中心に、相談に応じる体制を整えた。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き取り組む。 ・センター的機能として、小中高等学校の要請に応じてオンライン授業等本校での取組を紹介したい。
		本校教育機能の情報発信（おたより、学校webページの充実）	<ul style="list-style-type: none"> ・記事掲載にかかる起案ルートの簡便化を図り、適時的な情報提供を行った。 ・学部運営計画にwebページ担当者を位置づける、行事等実施計画においてweb担当を役割として示すなどした。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・学校webページの更新については、引き続き定期的かつ適時的に行う。 ・閲覧者に寄り添う構成にし、広く病弱教育について紹介できるようにする。 ・引き続き、著作権に留意するとともに児童生徒のプライバシー保護に努める。
		交流及び共同学習の推進（青森県交流籍制度）	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度居住地交流は、小学部3名、中学部2名が実施し、昨年度と同数であった。 ・中学部で浪岡養護学校と学校間交流を実施し、高等部は学生団体レスタと協同して総合的な探究の時間に取り組んだ。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、居住地校交流を推進するとともに、交流成果を周知することで、希望する児童生徒が実施できる環境づくりに努める。 ・对学校という枠組みに縛られず、地域住民等との交流も視野に、児童生徒の更なる体験の充実に資する機会を設定する。

<p>(11) 総括</p>	<p>【成果】 ○重点課題を念頭に置いた学校運営をし、当初目標としたことについて概ね達成できた。 ○特に、学校安全に関する目標に対しては、教職員、保護者、児童生徒ともに非常に高い評価を付けていたことから、今後も、病弱特別支援学校であると言う本校の特性を十分に理解した上で、引き続き児童生徒にとって安全かつ安心できる学校づくりに心がけたい。 ○学校評価項目を見直し、同じ重点課題を教職員、保護者、児童生徒の三者が評価できるようにしたことにより、分析の視点が拡大し、次年度に向けての課題の洗い出しに奏功した。次年度に向けて、アンケート項目（表現）の更なる精選をし、より学校運営に係る課題の洗い出しに資するものにする。</p> <p>【課題】 ●<u>一人一人のキャリア発達を支え、小中高一貫したキャリア教育の推進</u> ・教職員一人一人がキャリア教育の意義を十分に理解して授業に臨む必要がある。キャリア教育に関する更なる研修に加え、本校版「キャリア・パスポート」である「キャリアブック」の効果的な活用方法についてもより一層研修を深める必要がある。 ●<u>よりわかりやすく、伝えたい情報を的確に伝える学校webページ</u> ・誰に対して何を伝えるのかということを明確にし、一般の閲覧者にとってわかりやすい記事づくりをする。併せて、全職員が個人のプライバシーや著作権などにも十分に留意したwebページづくりを推進する。 ●<u>了解可能な文言の再定義</u> ・「キャリア教育」をはじめとする一見誰もが理解しているような文言が、教職員間で意外と曖昧に使われており、理解に微妙な差異があることが明らかになった。そこで、本校としての文言の定義を明確にし、共通認識の下で学校の運営ができるようにする。</p>
----------------	---